

崔書勉先生と私

渡井 幹子

「崔先生と私」というテーマを与えられた時、私が考えたことは九〇才の誕生日を迎えられ日韓談話室一同、他 多数の方々のご参加により、盛大な祝宴を開催することができ、崔先生始め、全員で喜びを分かちあえた点である。私にとっては生涯忘れることのない、感謝の瞬間であった。崔先生の学識深く魅力溢れる講話を拝聴しながら例えばソウル南山の安重根義士記念館を訪れた時のことを想い出している。安重根義士記念館に収められている安重根直筆の高能書から「四書三経」、詩文や、きわめて雄渾な遺墨の数々を鑑賞した時、漢字の家に生れ、強い意志と秀でた頭脳を持ち、高い学問をきわめている安重根の姿を垣間見た思いであった。

金鍾泌元国務総理先生と日本の総理との会談「大平会談」の内容は特別な思いで拝聴させていただいたことなどが挙げられる。今日まで成長することができたことを「ありがとうございます。」と心からの御礼を申し述べたいと思っている。

そこで崔先生にまねの出来ることはないかと頭をめぐらせたところ、あった。それは私の健康管理の努力目標と天からの計らいにもよるが、九〇才迄生きるということだ。

そんな時、良い機会なので、自分自身について少し振り返って見ようと思い、手許にあった私の母校、都立小山台高校の卒業生が書き記した文集を繙いてみたところ、私が書き綴った、「強く生きる」という文面が目に残り、読み返してみると崔先生との会話の中、仲間との間で、常日頃話している言葉の数々だった。

例えば

「自分にはもちろん、他人に対しても私が表現しなければ、物事の内容を伝えることができない。」

「何事も話さなければ分らない。」

「目の前に起っていることをクリアーしないと隣には行けない。」

「目の前に起ってくる諸々の現象は偶然ではなく、ほとんど必然 (Inevitable) である。」

「人生のテーマは生き残りの戦略 (survival) だと思つて私は生きてゐる。」

「他人がどう思っているかなんてことに関心を向けては絶対にいけない。」

「過去と他人の心は変えることはできない。」

貴方自身が変わってみませんか？

自分自身が変わらなければいけない。」

「意思があれば、何事も成し与わん (where there is a will, there is a way.)。」

父親からの言葉「仁を見て法を説け。」母親からは「念ずれば華ひらく」ということを忘れない様に、等々、常日頃の言葉の数々は高校生のときから考え、使っていたことに気づき、びっくりしているところである。

進学校に学びながら、進学せず、就職した時の気持は、文集の中にあるが、現在迄、数多い方々に如何にお世話になったかを思い起こす。

その第一。三井銀行(現三井住友銀行)に入行した時より、橋本宇一先生(東京大学名誉教授)御存命の間、賜ったご恩は決して忘れることはない。入行時、保証人となって下さり、身にあまるほどの後立てを橋本先生よりいただきながら、営業店勤務・本部勤務の経験を活かし、人事部研修所でインストラクターの仕事を全うし、停年退職(六〇才)まで勤務できたことは、本当に有難いことだった。

立ち留まって一人の人間として考えてみると、目に見えない橋本先生の力の大きさを感じ、そのお陰で安心して仕事に取り組んでいたのだと、唯々感謝の気持ちでいっぱいになっている。

後輩を指導する立場にあつたので、江木武彦先生の話し方教室に通い、「話は力だ！」ということをし込まれた。話しは心で話すのだと徹底的に仕込まれたことは今に生きていると思っている。他にもカウンセリング、交流分析などを学べたことも良かったことに数えあげられる。

今、私があるのは、諸先輩のお導きの賜物と思っている。高邁な崔先生と、縁あつてからは、世界情勢を始め、日韓関係、歴史問題など数えあげれば、切りのない興味深いご講話を拝聴し、成長を続けさせていただいている。前に述べた通り、私は高い目標をかかげているので、崔先生のご長命を祈り、今後のご指導を賜りたく願っている。

更には、日韓談話室の益々の繁栄を期待している。

追伸一、目に見えない過去に縁のあつた人同志は今世で必ず出逢うことのように思える。例えば、橋本宇一先生は橋本明氏の父上のご兄弟、お兄様でいらつしやり、息子鐵司氏は私の高校生時代の同級生であつたという事実は、一見不思議であるが、それは事実であり、現実のことである。

追伸二、心が痛く、気になることが最後になつてしまつたが崔先生とのご縁は日韓談話室世話人寺田佳子氏と友人であつたことから始まっている。思い出があり過ぎペンを走らせる勇氣を持ってないでいる。しかし五十五周年記念寄稿集にも書いたが、朴権恵大統領にソウル国会内の午餐会に招かれた貴重な体験は、世話人・橋本明氏、寺田佳子氏のお陰である。

朴権恵前大統領には、明るく微笑みをたたえ、澄んだ瞳で、あの時交わした「政治と結婚する」という信念を全うする人生を送っていただき度いと思料している。

さらに常日頃、陰で一番お世話をされている森松義喬氏に心からの感謝を申し述べたいと思う。寺田佳子さんもよくそう

話されていた。記念寄稿集の出版は並大抵のことではやり遂げられないと考えるが、森松氏はいつも黙々と成功させている。橋本明世話人始め崔先生を囲む会、日韓談話室メンバー全員の協力の賜物であることももちろん忘れてはいない。囲む会皆様、本当にありがとうございます。御礼迄申し上げます。



